

「お店に向かう途中でお腹が減り過ぎて歩けなくなっちゃってね、倒れたの。そしたら近所の飛竜がちょうどその夕イミングで水浴びを始めちゃってね、快晴なのにびしょ濡れっていうよくわかんない状況に陥っちゃった」

あとはご存じの通り、僕は彼女に救われて、今こうして食後のコーヒーでほっとしている。

かろうじて首の皮一枚つながっていた。

……僕にまつわる不幸な祈りにまつわる現状は何一つとして好転していないのだけけれど。

「なるほど」

彼女はただ一言だけそう応えて、カップをテーブルに置く。「災難だったわね、マクミリア」

「おっといきなり呼び捨てとは」話の中で何度か僕の名前は語ったから今更自己紹介する必要はないかなとは思ってたけど距離感近すぎませんか？

「いいじゃない。私とあなたの仲でしよう？」

「ほんの少しくらい前に逢ったばかりなんだけど」なんなら初対面で僕蹴られてんだけど。

「けれど同じ釜の飯は食べたわ」

「……………」

「…………私って人を呼び捨てで呼びたい類たぐいの人間なのよ」よくわからん理屈だけどそうしたいなら最初からそう言えばいいじゃないかと思いましたハイ。

「まあ——要するに、結果として僕はもう働けない運命

になっっちゃったってことかな。これで僕のお話はおしま  
い」

僕は<sup>おおむぎよう</sup>大仰に肩をすくめてみせた。

今も大聖堂に人は寄り合い、祈り続けている。

たとえ国から規制されようとも、今を生きている人たち  
には関係ないのかもしれない——いや実際僕も今を生き  
られなくなりそうだったから祈ったんだけどね！

いやはや困った。

これからどうやって生きていこう。お先真っ暗感がすご  
い。生活保護とかやってくれないかなー。頼むよ<sup>りようしきと</sup>領域都市  
さん。

「そんなクソみたいな現状に陥っているあなたにいい話が

あるわ」

「クソて」

彼女は僕をまっすぐに見つめていた。「不幸にも罹<sup>かか</sup>ってしまった祈りだとか、重大なエラーを起こしている大聖堂のせいで変な風に罹<sup>かか</sup>ってしまった祈りだとか——そういつた呪いとも呼べる類<sup>たぐい</sup>の祈りを解くことができる方法がね、実は一つだけあるの」

「もう一度祈りをかけることじゃしよ?」

しかし彼女は首を振る。

「そうじゃないわ。そんなまどろっこしいことをしなくても、呪い自体をなかったことに出来る方法があるの——簡単に言えば、解<sup>かいじゆ</sup>呪<sup>じゆ</sup>ができるのよ」

解呪とな？

「……どうやって」

「うわ。滅茶苦茶怪訝めちやくちやげんな顔してる……」

そりゃそうだよご飯恵めぐんで貰もらっておいてアレだけど、僕  
こう見えてもけっこう疑り深いんだよね。いきなりそんな  
提案されても「マジ？ やったぜ！ ああん素敵！」って  
なるわけないよね。そこまで僕も馬鹿ばかじゃないんだよね。

「仮に祈りが解けるとして、どうやったら出来るの」  
けどまあ、聞くだけなら別にいいかなとも思っで、僕は  
首を傾けていた。

すると。

「私」と。

……ん？

なんと？

何言ってるのかなーこの人。と思いつつながらぽかーん、と  
している僕に、彼女は、

「私ね、実は罹った祈りを——呪いをなかつたことにす  
る仕事をしているのよ」

と言った。

わりと自信満々な感じで。

○